二〇二二年度　田園調布学園大学
全学部全学科専攻　共通

国語　入学試験問題

一般選抜（個別試験型）全学統一日程

受験番号

（注意）
一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄にかならず記入してください。
三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてもかまいません。
五、試験時間は六〇分です。

氏名

（一）次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもにやる気を出させたいとき、部下に自発的に頑張ってほしいとき、自身を①鼓舞したいとき等々、自分も含めて誰かのモチベーションを上げたい、という場面にはa頻繁に遭遇します。多くの人はそんなとき、目に見える報酬を用意して、モチベーションアップにつなげようとするのではないでしょうか？

たとえば、子どもには「成績が上がれば欲しいものを買ってあげよう」と伝えてみたり、部下には昇給や昇進を約束したり、自分自身にも「自分へのごほうび」を期して何ごとかを頑張ろうとしたりする、などです。

A　、この方法は本当に良い方法と言えるのでしょうか？

この問題について、実験的にbブンセキした人たちがいます。スタンフォード大学の心理学者レッパーの研究グループです。

実験は、子どもたちに絵を好きになってもらうにはどうしたらよいか、というテーマのもとにcリツアンされました。子どもたちをふたつのグループに分け、片方のグループには「良く描けた絵には素晴らしい金メダルが与えられる」ということを前もって知らせておきます。もう一方のグループには、メダルが与えられるという話は一切しないでおきます。

この操作のしばらくあとに、子どもたちのグループそれぞれに、実際にクレヨンと紙が渡されます。そして、子どもたちがどれだけ絵に取り組んでいたか、取り組んだ時間の総計と課題に傾ける熱心さを観察します。

すると、②メダルを与えると伝えた子どもたちのグループは、メダルのことを何も知らなかった子どもたちよりも、ずっと課題に取り組む時間が少なかったのです。あたかも報酬を与えることそのものが、子どもたちを絵から遠ざけることになってしまったかのような結果でした。

絵を好きになってもらうために、良かれと思ってごほうびを約束したことが、かえって逆効果になってしまったのです。グループを変えて何度実験してもこの結果は変わらず、データには③再現性がありました。

なぜ、このような現象が生じてしまったのでしょうか？　この実験を行った学者たちは次のように述べています。

子どもは、「大人が子どもに『ごほうび』の話をするときは、必ず『嫌なこと』をさせるときだ」というスキーマ（構造）をそれまでの経験の中から学習してきており、報酬を与えられた子どもは「大人が『ごほうび』の話をしてきたということは『絵を描くこと』＝『嫌なこと』なんだ」と、報酬そのものの存在がタスクを嫌なこととして認知させてしまう要因になると指摘したのです。

これは、子どもに限った話ではありません。別の研究者による実験では、大人の被験者を対象に、公園でのごみ拾いという課題に楽しさをどのくらい感じたか、という心理的な尺度が測定されています。

「目的は公園の美化推進を効率的に行うにはどうすればよいかの調査です」と被験者には伝え、絵を描かせる実験と同様に、この実験でも被験者を2グループに分け、片方のグループには報酬として多めの金額を提示しました。もう一方のグループにはごくわずかな報酬額を提示しました。

そして作業終了後には全員に、ごみ拾いがどのくらい楽しかったかを10点満点で採点してもらいました。

すると、謝礼として多めの金額を提示されたグループでは、楽しさの度合いの平均値は10点満点中2点となったのに対し、ごくわずかな報酬額を提示されたグループでは、平均値が 8・5点だったのです。

つまり、何かをさせたいと考えて報酬を高くすると、かえってそのことが楽しさや課題へのモチベーションを奪ってしまうということが明らかになったのです。

公園のごみ拾いで高い報酬を提示された人たちは、ごほうびをもらえると言われた子どもたちと同じように「高い報酬をもらえるからには、この仕事はきつい、嫌な仕事に違いない」と考え、楽しさが激減してしまったのです。

逆に、ごくわずかな報酬を提示された人たちには認知的不協和(注)が生じ、「わずかな金額でも自分が一生懸命になっているということは、この課題は楽しい課題に違いない」と自分で自分に言い聞かせるようになったと考えられます。

類似の実験は課題を変えて何度も再現性が確認されていますが、報酬額や仕事の内容によらず、低い報酬を約束された人は高い報酬の人よりも常に頑張ってしまい、課題の成績も良く、

B　圧倒的に楽しいと感じているという傾向が見られます。

④この心理が、ブラック企業に利用されているのかもしれません。酷使されても辞めないケースの中には、低い報酬だからという要因も考えられます。

私自身も疑問に思い、日本テレビ系列の番組『世界一受けたい授業』の制作スタッフに同様の実験をしてもらいました（２０１８年5月5日放送）。すると、やはり報酬額の少ないほうがその課題を楽しく感じる、という結果に変わりはありませんでした。

人にやる気を起こさせようとするとき、多額の報酬を与えることはほとんど意味がないということがこれでわかります。短期的には馬力を出すための励みになるかもしれませんが、長期的に見ればかえって仕事に対する意欲を失わせる原因になってしまう可能性があります。

人をやる気にさせるのに効果的なのは、その仕事自体が「やりがい」があり、素晴らしいものだとくり返し伝え続けることと、「『思いがけない』『小さな』プレゼント」です。予測される報酬ではなく気まぐれに与えられること、しかも少額であることが重要です。多額のものでは、せっかくd醸成されたその人のやる気が失われてしまいかねません。

もともと仕事の内容が嫌なものであることが明らかな場合には、現実的な額の報酬を与え、その後、「　　C　　」などの心理的報酬、つまり承認欲求を満たす言葉を上手に使っていくのが効果的です。

逆を言えば今、給料は少ないし休みもないけれどやりがいがある、という状態にあるとの自覚を持っている人は、一度自分の状態が客観的に見てどうなのかを振り返ってみることが必要かもしれません。

しかし、「報酬を目当てにみんな仕事をしているし、昇給すればうれしいし、言葉よりも具体的な金額として自分の努力が認められるのは幸せなことじゃないか」と、多くの人は反論したくなるだろうと思います。　D　、ある種の課題では、外的動機づけと呼ばれるわかりやすい報

酬が生産性を上げるのに　　E　　を奏することがわかっています。

それでは、報酬を与えるのはどんな課題のときがよく、どんな課題のときには報酬を与えてはいけないのでしょうか？

この問いに答えを与えるのが、あまりにも有名な、ドゥンカーのロウソク問題です。私も以前、著書の中で触れたことがあります。

心理学者ドゥンカーが考案したこの実験では、次のような道具を使います。

ロウソク1本、マッチ1束、画鋲（がびょう）1箱。

実験中、被験者に対してひとつの課題が与えられます。ロウソクをコルクボードの壁に固定して、火をつけるというものです。ただしこの課題には条件があり、融（と）けたロウが下のテーブルに落ちてはいけません。また、ロウソクを直接画鋲でコルクボードに固定することもできません（物理的にも難しいです）。

この問題の答えは、箱から画鋲をすべて取り出し、画鋲で箱をコルクボードに固定、そこにロウソクを立てて、マッチで火をつけるというものです。画鋲を入れてあった箱を　　F　　として使えるかどうか、という創造性が求められる課題なのですが、今や有名になりすぎて、創造性を測るテストとしてはもはや使うことができないでしょう。

それはさておき、この課題の被験者をやはりふたつのグループに分けて、片方には多額の報酬を与え、もう一方にはやりがいのみを与えるという条件を設定します。

すると、予想どおり金銭的報酬を与えたほうがひらめくのに余計に時間がかかってしまい、やりがいのみを与えたグループのほうが平均して数分早くこの問題を解くことができたのです。この結果はおそらく多くのみなさんが想像したとおりです。

創造性を上げたいときには報酬を与えてはいけない、　　G　　、やりがいを与えたほうが創造性が高くなる、ということがわかりました。類似の現象は多くの分野で実際に見られるのではないでしょうか。

　　H　　、この問題には別のバージョンがあります。課題も条件も同じで、ただ画鋲が箱から出されている、という点だけが違うものです。画鋲が箱の中にあるか外にあるかだけで問題のeナンイ度はまったく変わってきます。あらかじめ画鋲が箱の外にあれば、創造性やひらめきはまったく必要なく、課題はただ与えられた材料を組み立てるだけの単純作業になるからです。

では、そうなると実験の結果は変わってくるのでしょうか？

予想どおり、このバージョンでは、　　I　　グループのほうが圧倒的に早く、この課題をやり遂げるという結果になりました。単純なルールとわかりやすいゴールの見えている短期的な課題に限れば、外的動機づけが有効だ、ということが改めて確認されたわけです。

中野信子『空気を読む脳』講談社　２０２０年２月

注　「認知的不協和」とは、人が自身の思いや行動とは別の矛盾する思いや行動を抱えた状態、あるいはその際の不快な気持ち。人はこの「不協和」を減少しようとして思いや行動などを変更する傾向があるという。アメリカの心理学者フェスティンガーが提唱した。

問一　二重傍線部a～eについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二　傍線部①「鼓舞」、③「再現性」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①鼓舞

ア　刺激を与えて元気づけること
イ　励ましふるいたたせること
ウ　なぐさめ力づけること
エ　ほめて応援すること
オ　好奇心をかきたてること

③再現性

ア　同じような事件や事故がまた起こること
イ　一度消えてしまった現象がもう一度起こること
ウ　今までとは別の立場で改めてその値打ちを見出すこと
エ　同じ現象が繰り返し起こったり、観察されたりすること
オ　同じ条件下で安定して期待される役割を果たすこと

問三　空欄A・B・D・G・Hに適する語を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　いわば　イ　さて　ウ　しかし　エ　しかも　オ　すると
カ　たしかに　キ　つまり　ク　なぜなら　ケ　むしろ　コ　よって

問四　傍線部②「メダルを与えると伝えた子どもたちのグループは、メダルのことを何も知らなかった子どもたちよりも、ずっと課題に取り組む時間が少なかったのです」とあるが、なぜこのような結果になったのか。一〇〇字以内で説明しなさい（句読点や記号を含む）。

（下書き用）

問五　傍線部④「この心理が、ブラック企業に利用されているのかもしれません」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　企業の経営者は、報酬を高くすると、そのことが被雇用者のやる気や課題へのモチベーションを高めるということを知っているのに、わざと昇給させない可能性がある。

イ　企業の経営者は、高い報酬をもらっている人はあまり働かず、報酬の少ない人の方がよく働くという事実を隠そうとして、給与の不公平性を隠す可能性がある。

ウ　企業の経営者は、報酬そのものの存在がタスクの価値を下げると思ってしまう被雇用者の心理をうまく利用して、より低賃金で人を雇用していく可能性がある。

エ　企業の経営者は、人にやる気を起こさせようとするとき、多額の報酬を与えることはほとんど意味がないということから、賃金の高い人をクビにする可能性がある。

オ　企業の経営者は、「やりがい」のある仕事に就くことができているという被雇用者の気持ちを利用し、休みがないことや給料の不十分さを正当化する可能性がある。

問六　空欄Cに入る表現として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　誰もがいやがり避けたがる仕事です
イ　何よりもやりがいが感じられる仕事です
ウ　報酬に全くこだわらない裕福な人の仕事です
エ　あなたのような人でなければできない仕事です
オ　引き受ければあなたの評価が上がる仕事です

問七　空欄Eに適する語を漢字一字で答えなさい。

問八　空欄Fに入る最も適当な語を文中から探し、漢字二字で答えなさい。

問九　空欄Ｉに入る表現として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　報酬を与えられた
イ　やりがいのみを与えられた
ウ　集中力にすぐれた
エ　ひらめきを持った
オ　承認欲求を満たされた

問十　次のア～オについて、右の文章の内容に合うものには○、合わないものには×を記しなさい。

ア　課題や仕事に対する取組みが、ごほうびや高い報酬を与えることによって、与えない場合と比較するという実験では、大人の場合と子どもの場合は異なる。

イ　日本人は、低い報酬できつい仕事を与えられたとしても、努力する過程を重んじるという傾向から、かえってやる気を出して頑張ってしまうという傾向がある。

ウ　低い報酬できつい仕事を与えられると、その矛盾に不快感を抱き、その矛盾を解消しようという心理が働き、きつい仕事にやりがいを見出そうする傾向がある。

エ　課題や仕事で創造性をあげたい時には、ごほうびや高い報酬を与える一方で、タスクに対するやりがいを十分に説明することが大事である。

オ　課題や仕事に創造性を求める時は、高い報酬を提示するよりもごくわずかな報酬を提示する方が効果が上がる。

（二）次の文章は、須賀敦子の『ミラノ霧の風景』の文章の一節である。以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

スパッカ・ナポリという名の通りは、一九四七年に書かれたドメニコ・レアの同名の小説で有名になったが、ナポリ人の心のなかにいろいろな色合でしっかりと根づいている、活気にあふれた、世にもおかしな通りなのである。そこでは、人間とそのあらゆる営みが四六時中、あらゆる種類の不協和音を奏でながら同時進行をつづけている。スパッカ、というのは「まっぷたつに割る」という意味の動詞である。「二分する」といった漢語的な語感ではなくて、ちょうど薪をぱあんと割るように、「まっぷたつ」なのである。だからこの通りの名は、「ナポリまっぷたつ」とでも言えばよいのだろうか。「スパッカ」という音には「ばっさり」というような①小気味よさと庶民的な響きがある。古代からの三本の道路の中央に位置していて、ナポリの歴史的都心を東西に分断している。

ナポリとナポリ人が好きだった夫が生きていたころ、そのスパッカ・ナポリが、どれほどナポリの庶民精神を典型的に映しだしているかという話をaサイサン聞いたことがある。そんな話のひとつの主人公は、②この通りに住んでいたあるオバサンで、彼女は毎朝、ガタガタになった古椅子を一脚、自分の家のまえの通りの中央に運びだして、それにドッカリと腰をおろす。当然、そこで私は、おしりもなにもすべて豊満で巨大な中年の女性を想像するのだが（もちろんそれはソフィア・ローレン(注1)でもいい）、スパッカ・ナポリは幅四メートルほどの、かなりせまい道なのである。オバサンがすわると、自動車はともかく、トラックは絶対に通れない。そこでオバサンは、私設通行税をbチョウシュウするというのだ。

トラックがやってくる。オバサンがすわっている。運転手は警笛を鳴らすが、オバサンはc磐石のごとく、びくともしない。「ここはアタイの家のまえだもの、ここにすわっていてなにがわるいのさ」というのが、オバサンの論理だそうである。運転手とオバサンはそこでえんえんと議論をたたかわす。そして、結局は「いいよ、どうしても通りたいのなら、アタイを轢いて行きな」とガンバリ通すオバサンが最後の勝利者となり、運転手はなにがしかの金額――それは、現在の私たちの金銭感覚からいって、たとえば十円くらいの、まったくの小銭なのである――を支払って通してもらうことになる。驚いたことには、近所の人とか、辺りにいる人は、それを当然、オバサンの生活手段として、この行為を認め、ウマイことを考えたと　A　は覚えても、けっしてこれを阻止あるいは　B　さえすることはないというのである。

ミラノにいてこの話を聞いたときは、まさかと思った。ところが、スパッカ・ナポリに五ヵ月住んでみて、納得した。そればかりか、こんな話は、スパッカ・ナポリにかぎらず、この都市の庶民的な地区ならどこでも聞けそうなことなのだ。それをわざわざスパッカ・ナポリと限定するところが、この通りの住民がいかにナポリの　C　かたぎを代表しているかを示すということも、だんだんとわかるようになった。

さして大きくない都市に、半年ちかくも仕事をもって家をかまえるとなると、一応観光客とは③一線を画したかたちでその土地にかかわることになる。しかし、それまでにもイタリアでいくつかの大都市、あるいは小都市で一定の期間を過し、それぞれについて自分なりの理解を持つなり、理解に到る方法も身につけたと自負していた私は、いまナポリに来て、深い　D　感のよう

なものにおそわれ、しばらくはすべての感覚が鈍ったように思い、反射神経が正常に働かない自分にいらだつのだった。たとえば道路を横断しようとするとき、自動車がまったく予期しない速度で、いつ、どの方向からこちらに向って走ってくるかわからない、というのがナポリでは通常の状況なのである。それが競技場で相手がボールなら、まったく初歩的な設定なのだが、④道路を横断することとサッカー・ゲームをまったく別のことと判断するような学校教育や市民教育に慣らされ、知らぬ間に硬直してしまったわが精神と肉体は、これに対応するすべを知らず、私はある種の屈辱感にさいなまれるのだった。

「ナポリはイタリア中でも私の一番嫌いな都会です。よく人の語るイタリアの不愉快さは実は⑤ナポリの不愉快さでせう(注2)。此麼(こん)な俗悪な都会にイタリアを代表させるのは困ります」

これは美術評論家の板垣鷹穂氏の名著『イタリアの寺』の中での氏の述懐である。あるいは「真白く濃艶な姿を緑色の水に映し」、あるいは「テベーレ(注3)の河岸に中世期の物寂びた幻想を与える」、歴史に支えられた古寺の数々を訪れ、「ペルジノの絵のように長閑」な、また「秋の光に橄欖(かんらん)の葉の輝く平和な野が低く遠く展け」る田園風景に接し、そのたびに心を満たす　E　をつづる著者が、ナポリだけは、このようにきびしい批判の数行で片付けてしまう。そこにはかつて私が父からもらった絵はがきの「⑥ナポリを見て死ね」のような　F　感はいささかもない。

そして、ナポリで暮らしはじめた私が感じていたのは、父の　F　感よりも、板垣氏の困惑にずっと近いものだった。この都会には、秩序とか、勤勉とか、まがりなりにも現代世界に生きると自負する私たちが、毎日の社会生活において遵守(じゅんしゅ)しなくてはならないと自ら信じ、人にも守らせようと躍起になっているもろもろの社会道徳を真っ向から無視して、大声で笑いとばしているようなところがあるのだ。ひろびろとしたテラスからカプリ島とヴォメロの丘とサンタ・キアラ(注4)の直線的なゴシック建築の側面が見える、いかにも現代的でしゃれた室内装飾の私のアパートメントも、住んでみると、たとえば設備の面では、家中さがしまわっても、ひとつとして　G　に使える電気のコンセントがなかったし、どの水まわりも、ちょっとのことで水はけがわるくなった。毎夕、ゴミを持って、エレベーターなしの(一八世紀に建てられた、すなわち、ひどく天井が高い建物だから一階分の階段がおそろしく長い)五階から一階まで降り、また五階まで上ってくるのは、ひどく息のきれる仕事だった。

しかし、日が経つにしたがって、私はそんな生活にも少しづつ(注5)慣れていった。パンを焼くあいだは、コンセントにつっこんだプラグを手で支えていればよい、　H　。私はだんだんそう思うようになったのだ。すると、また、テラスの眺めを心から愉しむことができるようになっていった。

家に慣れてくると私は、近所からはじめて、だんだんと遠出するようになり、徐々にスパッカ・ナポリおよびそれが代表する庶民のなかにいて、いらいらせずにいられるようになったばかりか、これを愉しむことも覚えはじめた。

そんなころ、毎日の大学の往復にまえを通る⑦八百屋のおばさんが、このナポリを学習する作業のなかで、大切な辞書の役目をしてくれた。最初その店に目がとまったのは、ルゲッタという、香りのたかい、ほんのりと苦みのある私の好物のサラダ菜の、いかにも新鮮なのを売っていたからだった。そのうち私が通ると、おばさんが、今日はいいルゲッタがあるよ、と声をかけてくれ

るようになった。その店でいつも買うようになると、値段もだんだん安くなっていった。一キロいくらと値段は表示してあるのだけれど、はじめのうちは秤にかけるときに一瞬気を散らしたりすると、あっというまに値段が跳ねあがるのだった。

その八百屋は買ったものをいつも新聞紙にくるんでくれた。ちょうど古新聞の処理に困っていた私は、一定の量の新聞がたまると、それを大学に行くときに持って出て、おばさんに渡すことにした。そんなことが何度かあって、私たちはだんだんと親しくなっていったように思う。ある日、いつものように大学の帰りに寄ると、おばさんがこう切りだした。「奥さん、あなたにお礼を言わなくちゃ。ほんとにすばらしいものをありがとう。でもほんとにあれはもらっていいのかしら」とっさになんのことかわからなくて、私はとまどった。おばさんはつづけた。「ああ、でも、きっとあなたは心のひろい人だから、あたしにプレゼントしてくださったに違いないよね。ほんとにありがとう」「なんのこと、いったい？」ようやくたずねた私の目のまえで、おばさんは更紗模様の一枚のハンカチを振ってみせた。「すばらしいハンカチだわ。あたしにと思って、新聞紙のあいだに入れといてくださったのはまちがいないと思ったんだけど、万一そうでなかったらとも考えて、とにかく聞いてみることにしたのよ。だまっていれば泥棒ですもんね。ほんとうにご親切ありがとう」あっと思った。整理のわるい私のハンカチが、古新聞に紛れたまま、おばさんの手に渡ったのだった。だが、ハンカチはすでにおばさんの支配下にあり、私はこう言うのがやっとだった。「でも、そのハンカチは使いかけだから。せめてｄセンタクしてアイロンかけて持ってくるわ」「とんでもない」とおばさんは言った。「じゃ、やっぱりあたしにくださったのね。ありがとう。センタクはもちろんあたしがしますよ。ほんとにありがとう。すてきなハンカチよ、これは」

こうして私はちょっと自分にはｅ贅沢だと思いながら東京を出るまえに買った、大判の美しいハンカチを失った。やられた、と頭をかきたい気持だったが、どういうものか腹は立たなかった。なにかゲームに負けたような、子供っぽい口惜しさが残っただけである。

そのおなじおばさんが、またある日、図書館での仕事がようやく終った午後三時すぎに、おそい昼食にとサラダ菜を買うために立ち寄った私に、「あら、お昼まだなの」とあきれたように言い、「そんなら、あたしたちと一緒に食べて行かない？」と誘ってくれた。「どうせろくなものはないけれど、ちょうどうちでもいま食べはじめるところだったのよ。ここにすわって食べてくださいよ」

おばさんが指さした店の一隅で、彼女の息子が木箱の上に食器をならべて、熟したトマトと卵の簡単な料理を黙々と口に運んでいた。知り合ってたったひと月ほどの、いわば見知らぬ外国人を、こんな粗末な食卓に招いてくれるおばさんの気持がうれしくて、辞退はしたが私は涙が出そうだった。すばらしいナポリのおみやげをもらったと思った。十年余を過した北の都会では一度も経験したことのない、それは暖かいもてなしだった。ミラノが現代的で、ナポリは前近代的だから、というような説明は安易にすぎて、真相を伝えてはくれない。

須賀敦子『ミラノ霧の風景』白水社　１９９０年

注1　イタリアの女優（1934年―）。
2　「不愉快さでせう」とは、「不愉快さでしょう」のこと。
3　テベレ川のこと。本文には「べ」の横に（ママ）とあるが、省略した。
4　スパッカ・ナポリ通りに面したゴシック様式の教会。
5　「ずつ」に同じ。

問一　二重傍線部a～eについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二　傍線部①「小気味よさ」、③「一線を画した」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①　小気味よさ

ア　洒脱な感じや洗練された感じのするさま
イ　爽快な感じや物分かりのよい感じのするさま
ウ　痛快な感じや胸のすくような快い感じのするさま
エ　割り切った感じや諦めのよい感じのするさま
オ　軽快な感じや晴れ晴れした気もちのするさま

③　一線を画した

ア　やや距離を置いた
イ　明確に異なった
ウ　多少は違った
エ　レベルを上げた
オ　あまり関与しない

問三　空欄A・B・D・E・F・Gに入る最も適当な語句を次の中から各々一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　軽蔑　　イ　歓喜　　ウ　挫折　　エ　羨望
オ　満足　　カ　恍惚

問四　空欄Cに入る最も適当な語を文中から探し、漢字二字で答えなさい。

問五　傍線部④「道路を横断することとサッカー・ゲームをまったく別のことと判断するような学校教育や市民教育に慣らされ、知らぬ間に硬直してしまったわが精神と肉体は、これに対応するすべを知らず」とあるが、どういうことか、その説明として、最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　道路を横切る際は道路交通法によりどのように車が来るのか決まっているが、サッカー競技ではどのようにボールが飛んでくるかはわからない。そのような常識を身につけてしまった私の精神と肉体は、サッカーボールが飛んでくるようにやって来るナポリの自動車に、うまく反応できないということ。

イ　横断歩道では自動車は歩行者の歩行速度に合わせることが重要であるが、サッカー・ゲームをする際はボールのスピードに合わせることが重要である。そのような道徳を身につけてしまった私の精神と肉体は、サッカーボールが飛んでくるスピードで走って来るナポリの自動車には対応できないということ。

ウ　我々は、道路を横切る際に自動車がどこから来るか注意しなければならず、サッカーゲームをする際には、サッカーボールがどこから来るか注意しなければならない。そのような原始的な感覚を忘れてしまった私の精神と肉体は、飛んでくるサッカーボールも走って来る自動車にもうまく反応できないということ。

エ　我々は、道路を横切る際はどうすればよいかを学校の授業で学んでいるが、サッカー・ゲームのルールを学んでいるとは限らない。このように不完全な形で教育を受けてきた私の精神と肉体では、走ってくる自動車には対応できても、飛んでくるサッカーボールには対応できないということ。

オ　道路を横切る際には道路交通法に則り、サッカー・ゲームをする際にはそのルールに則るというのが社会常識である。そのような常識に慣らされた私の精神と肉体は、サッカー・ゲームのルールを用いて、サッカーボールが飛んでくるように走って来るナポリの自動車には反応できないということ。

問六　傍線部⑤「ナポリの不愉快さ」とあるが、ナポリで暮らし始めていた筆者は、それをどのように考えていたか、一〇〇字以内で説明しなさい（句読点や記号を含む）。

（下書き用）

問七　傍線部⑥「ナポリを見て死ね」と類似の意味をもつことわざを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　江戸の敵を長崎で討つ
イ　すべての道はローマに通ず
ウ　箱根知らずの江戸話
エ　日光を見ずして結構と言うなかれ
オ　ローマは一日にして成らず

問八　空欄Hに入る最も適当な表現を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　水はけが悪いことについては諦めればよい
イ　流しの水ははけるまで待てばよい
ウ　水はけがよくなるように修理を頼めばよい
エ　流しに水を流さないようにすればよい
オ　水はけがよくなるように掃除をすればよい

問九　傍線部②「この通りに住んでいたあるオバサン」と傍線部⑦「八百屋のおばさん」の共通点として、最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　相手の迷惑も顧みず、人の嫌がることを平気でする点
イ　疎遠なうちは冷たいが、親しくなると優しくなる点
ウ　相手の出方次第で、態度を臨機応変に変えるような点
エ　すっかりだまされたと相手に思わせるような点
オ　まんまとやられたと相手に思わせるような点

問十　次に掲げるのは、本文の内容について五人の生徒が話し合っている場面である。その内容が、本文に照らして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　生徒A――筆者は、ナポリに複雑な感情を抱いているのね。風景は美しいけれども、一般常識が通用しないことや設備が整っていないので不便な点については、何とかしてほしいと思っている気がするわ。

イ　生徒B――私は八百屋のおばさんの話が面白かったわ。ハンカチをもらってよいか確認したり、そのお礼に食事に招いたりして、ナポリの人は律儀なのね。その食事もご馳走ではなく、粗末な昼食に招いたというのも実直な感じがするわ。

ウ　生徒C――筆者はナポリの人と交流するなどして、ナポリを自分なりに少しずつ理解していって、ナポリの生活を楽しむことが出来るようになったのね。だから、ナポリのことを一般論で決めつけるようなことはできないと思っているのよ。

エ　生徒D――板垣氏も筆者のお父さんも、どうやらナポリの風景の美しさにしか興味がなかったみたいだけれど、筆者のようにナポリで実際に生活するとナポリの新しい魅力をいろいろと発見することができるんだな。

オ　生徒E――僕もナポリに住んでみたいよ。秩序や社会常識に縛られない自由な精神の中にいたからこそ、ナポリは多くの優れた芸術家を輩出したんだ。そんな中で生活したら、東京育ちの僕の硬直した精神も解放されるかもしれないね。

（三）次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を、選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

①新製品の（　　）を分かりやすく説明する。
ア　コンセンサス　イ　コンセプト　ウ　コンプライアンス　エ　コンタクト

②コロナ禍で観光地の飲食店はどこも（　　）状態だ。
ア　忙中閑あり　イ　不眠不休　ウ　お茶を濁した　エ　開店休業

③手持ち（　　）を紛らわすため、スマホばかり見ていた。
ア　無聊　イ　時間　ウ　難癖　エ　無沙汰

④夏祭りは、夜を（　　）行われた。
ア　徹して　イ　通じて　ウ　またいで　エ　圧して

⑤目上の人への手紙には、冒頭に（　　）と書くのがマナーだ。
ア　前略　イ　拝啓　ウ　敬具　エ　清祥

⑥優勝者インタビューのとき、彼は満面に喜びを（　　）答えていた。
ア　ふくんで　イ　よぎって　ウ　こらえて　エ　たたえて

⑦自己の利益を（　　）してでも、社会全般の利益を優先すべきだ。
ア　放出　イ　懸念　ウ　度外視　エ　回収

⑧新発売のゲームで、熱に（　　）ように遊びつづけた。
ア　のめり込んだ　イ　うなされた　ウ　たぶらかされた　エ　浮かされた

⑨（　　）をすくわれないよう注意しよう。
ア　足　イ　足元　ウ　足先　エ　足跡

⑩「（　　）は双葉より芳し」とは、大成する人は幼少のときから優れているという意味だ。
ア　松竹（しょうちく）　イ　伽羅（きゃら）　ウ　栴檀（せんだん）　エ　薔薇（ばら）